

岩波
講座

日本文学史 第十三卷 近代

社会主義文学

稲垣達郎

岩波書店

社会主义文学

稻垣達郎

明治二十九年（一八九六）十月の『国民之友』第三二〇号に、「社会小説出版予告」なるものがかけられた。「国運伸張して社会の現象益々多色、多端」なるおりから、小説家は「社会、人間、生活、時勢」などの題目に着目すべきことを述べ、近く「社会小説」を順次刊行する旨を予告した。この計画は、けっきょく実現されなかったけれども、この予告がたまたまきっかけとなって、翌々年へかけて「社会小説」というものが文壇の日程にのぼり、しばしば、社会小説論がたたかわされた。論議は、だいたい、賛否両様の論に、概念規定の論がからまったものだった。これは、基本的には明治二十七、八年（一八九四―九五）の日清戦争後における、ようやくいちじるしくなってきた社会的諸矛盾を契機とする、主として硯友社一派の、情痴に流れ、江戸の通人趣味に堕した、非社会的・個人的俗流写実小説に対する反撥だったとみていい。明治三十年（一八九七）二月の『早稲田文学』第二八号の「彙報」欄では、これらの論を集約して、「社会小説」のタイプをつぎの五つに整理している。(1)貧民または労働社会のために気を吐くもの、(2)敢えて貧民または労働社会のために特に弁護するものではないが、これまでの作家が見落していた社会下層の真相を主題とするもの、(3)従来の恋愛に偏した小説に対して、ひろく社会の全体、すなわち政治・宗教その他あらゆる部面を取材するもの、(4)社会を主として個人を客とし、心的状態よりも外界の現象に重きを置くもの、(5)一代の風潮を指導し、社会の予言者たるもの、というのがそれである。

ここに、貧民とか、労働社会とか、社会下層とかいうことがでてきている。これが、いうまでもなく、まえにいった日清戦後における社会的諸矛盾、たとえば、石川旭山がその編する「日本社会主義史」のなかで、「曰く企業熱の勃興、曰く大工場の新建設、賃金労働者の激増、而して曰く軍備拡張、曰く租税増徴、曰く物価の騰貴、曰く細民労働

者の困窮、労働問題は世に喧伝せらるゝに至れり、社会問題は識者の意を注ぐ所となれり」と書いてゐるのに重なってくるわけである。これは、戦後のある期間にわたる状況であるが、「細民労働者の困窮」や貧富の隔絶ということ、もとより、「社会小説出版予告」のまえからあり、文学者の一部の視野にはいってきつてゐた。田岡嶺雲（明治三〇—大正元年）が、明治二十八年（一八九五）九月、『青年文』（二ノ二）の「時文」欄へ無署名で書いた、こんにちあらためて有名になっている「下流の細民と文士」においても、するどくこれにふれてゐる。十九世紀のいわゆる文明開化なるものは富者に厚い文明であり、文華の発達にともなう奢侈の風は、「窮乏者を擠して弥々塗炭に苦ま」しめ、富むものはいよいよ富み、「貧き者は弥々貧」する。「今の文明は中流以上の徒を惡徳に陥るゝと共に、下流社会のものを擠して悲惨の谷に落す」ものである。かくて、現今の社会で、もっとも悲惨な運命、もっともあわれむべき生涯にあるものは、「下流社会の徒」でなければならぬ。そこで嶺雲はいう——「此悲惨の運命を歌ひ、この憫むべきの生涯を描く豈に詩人文士の事にあらざらむや。世は既に才子佳人相思の纖巧なる小説に飽けり、俠客烈婦の講談めきたる物語に倦めり、人は漸く人生問題に傾頭して神靈の秘密に聞かんとするの今日、作家たるもの満腔の同情を彼等悲惨の運命の上に注ぎ、渾身の熱血を其腕下の筆に瀉ぎて、彼等憫むべきの生涯を描き、彼等不告の民の為に痛哭し、大息し、彼等に代りて何ぞ奮て天下に懇ふるを為さざる」。さらにかれは、翌明治二十九年（一八九六）四月の『青年文』（三ノ三）で、「嗚呼文士涙なき歟」を書き、重ねて、文士詩人が貧者に代つてその苦悶のさけび声をもらして天地にうたえるべきだと言ひ、「卿等の眼中此悲惨の光景の映ずるあるなき歟、卿等の眼光もまた光をのみ見て暗黒にみる能はざる歟、或は之をみるも以て卿等の心を動かすに足らざる歟。嗚呼文士涙なき歟」と結んでゐる。いわゆる「悲惨小説」の名づけ親であり、また、その擁護者でもあった嶺雲が、その「悲惨」のもっとも大きな根柢を、さまざまの、時には特殊な、個人的事情のなかにではなく、ひろく社会的な矛盾のなかにそれを感じてくる時、貧富の隔絶の状態、下流細民の貧困生活が、「悲惨」のきわまれるものとなるわけだ。まず自然のすじみちというべきである。

『早稲田文学』の彙報子が、諸説のなから社会小説のタイプを整理するにつけては、嶺雲が主張するところの類も、もとより、おのずから組み入れられているはずのものだ。このタイプの整理をさらに発展させて、社会小説の範囲を規定するとともに、そのえがくべき眼目を指摘しているのが、ちょうど一年後の明治三十一年（二八九八）二月の『早稲田文学』第七年第五号にかかげられた金子筑水（明治三十一年—昭和二年）の「所謂社会小説」であった。かれは、その解釈を自由にして意義をひろく考えることと、実際の便宜（明治三十一年—昭和二年）ということとを条件として、四つの範囲をたてた。すなわち、(一)近世の社会主義（ツツアリズム）に関する事象をえがいたもの、(二)社会の個人に対する関係をえがいたもの、(三)漠然というところの小社会に関する事象をえがいたもの、(四)全体としての社会の行動をえがいたもの、の四種類である。これらは、『早稲田文学』彙報子があげた五つのタイプというものと、部分的につながっている、というより、ひろくそれらを包括するものであるが、いま(二)以下はいわれないとして、(一)の「近世の社会主義（ツツアリズム）に関する事象をえがいたもの」という考えは、このばあい注意されるわけだ。下流細民の貧困生活に対する常識的な認識を、いくらかでも合理的な方向へ発展させていることになるのだが、とにかく、その一年まえの『早稲田文学』彙報子の現状分析の対象としては、まだ十分に成熟していなかったものだった。筑水の論は、いうまでもなく彙報子の立場とはことなり、社会小説論の記实的分類ではなく、範疇論的ではあるが、社会小説の可能性の論である。おのずから、「近世の社会主義に関する事象」ということが予想されてきたのだったが、それがおのずからの予想として容易に浮かびあがるほどに、その一年の間に、「社会主義」への一般の接近なり関心のふかまりなりが、もう争われない事実としてあったことが考えられる。嶺雲にしても、すでに早く長沢別天（慶応四年—明治三十三年）らを通して社会主義についてある程度の知識をもっていたはずだが、この時期においては、「貧富の懸絶」を「富閥」の罪過によるものと考えようとする、「孤憤危言」中の「社会問題」（明治三十一年三月）にみえている程度において、社会主義的思想を具体的に示すようになってきている。⁽¹⁾やがて、社会主義思想あるいは社会主義論の高まりは、誰の目にもはいるほどのげいものになった。たとえば、「戦役以前、

人心の倦怠に對する反動と、工業勃興して、職工の數大に増すとよりして、一代の論議は、社会主義に向て傾注せんとするの勢ありしに、戦役の興奮劑は一時社会の変調を來して、かの主義の萌芽、二葉にして枯れたり。然るに近日に至りて此の問題に注意するもの卒然として多きを加へ、旬日間、社会主義の著書、一時並び出づ、是れ偶然といふ乎。抑も偶然の暗合は、寧ろ測り難き潛勢力が、其一道の光明を洩らす者に非ざる乎、世は政党に倦めり、国家主義、個人主義の争論に倦めり、社会主義の要求せらるゝ、亦循環の自ら至るに非ざる乎」といったたぐいの記述なら、すくなからずみあたるのである。いま、「循環の自ら至るに非ざる乎」というような考え方を問題にする必要もないだろうし、また、「旬日間、社会主義の著書、一時並び出づ」というばあいの社会主義書目を、ことさらにひとつひとつ列記するまでもなからう。さきに引いた石川旭山が説くところの戦後社会の状勢と、ますます照応してくることを知れば足りよう。

こういう時に、社会小説の概念のなかへ、「近世の社会主義ソシアリズムに関する事象をえがいたもの」という考えが、あらたに組み入れられてくるのも、まことに自然なことにちがいない。「近世の社会主義に関する事象をえがいたもの」という規定は、ここではいうまでもなく「社会小説」概念の一部にすぎないわけだが、その規定にぞくする諸条件は、じつは同時に、「社会主義文学」そのものを規定する諸条件として、おそらくはもつとも早く考えられているものとして、あらためて、きわめて重要な意味をもつものである。筑水は、もとより「小説」というジャンルで考えているのだけれども、いまいったように社会主義文学文というふうに拡大してみても、それほど不都合はなさそうである。すなわち、筑水は、「近世の社会主義に関する事象をえがいたもの」というのを、つぎのように説明する。

……下は労働社会対資本家の問題より、上は平民対貴族の關係、被治者対治者の關係、幼者対長者の關係、弱者対強者の關係、無教育界対教育界の關係等一々枚舉に遑あらず。フェルデナント、ラサール、ヘンリー、ジョルジを産み、マルクス、エンゲルス等を出だしし社会主義は、詩壇のラサール、ジョルジ、マルクスを出だすに足

らずとせんや。労働社会対資本家の境遇を画くも可なり、無教育界対教育界の事態を写すも可なり、要は広く社会の歴史上、社会主義の現るゝ原因、労働社会と資本家と争闘するに至る所以の動機、有教育者と無教育者と分るゝ所以の人世観等に着眼するにあり。(傍点・筆者)

筑水は、たんに「貧富」といわず、ひろく、社会的諸矛盾によるところの、社会的に対立する諸關係を、具体的な契機としてとらえているのだが、つまりは、「広く社会の歴史上、社会主義の現るゝ原因」を、えがくべき中心的重要なポイントとしているわけである。もともと、筑水の意識としては、どこまでも社会小説の「範圍」を規定することとあり、社会主義小説そのものをまともに規定しようと意識してはいなかったことはたしかであろう。けれども、意識するしないにかかわらず、それがそのまま、社会主義小説「文学の規定に密接に關係してきていること」もたしかである。積極的な意識がなかっただけに、社会主義小説「文学の規定としては、必ずしも十分なものになっているとはいえない」であらう。社会主義小説「文学という以上、「社会主義の現るゝ原因」をとらえたものだけにとどまらないはずだ」。たとえば、「原因」ではなく、その「結果」——社会主義そのものをとらえてもいいはずだし、さらに、社会主義への「過程」をとらえてもいいにちがいない。少し粗略にいえば、社会主義文学とは、社会主義への原因と過程と結果の一連、あるいはそのひとつひとつをとらえ、えがいたものといっても、大きな誤とはならないであろう。がまた、これを当面の現実に即していえば、「社会主義の現るゝ原因」こそが社会主義小説「文学をなりたせる最大の重要な要件であり、また、それこそがさし迫った課題でなければならなかった」といっている。したがって、筑水は、社会小説の範圍を考ふる途上において、はからずも社会主義小説「文学の規定にもふみ込んでいた」のである。自然のいきおいとしてそういうことが派生してくるほどに、社会主義への諸事情が成熟しつつあったといえるのである。⁽³⁾

註

1 三好行雄「写実主義の展開」(本講座第一二卷)

2 「社会主義」(第三次『日本人』第九号「江湖」欄明治三十二年八月)

3 この時期における社会主義的昂揚、ないしは労働運動・社会主義運動に関係のある二、三の現象を、いちおう挙げておくことにする――

○明治三十年(一八九七)四月、中村太八郎・樽井藤吉・西村玄道を幹事として「社会問題研究会」が結成された。品川弥二郎・三宅雪嶺・陸羯南・高橋五郎・中井錦城・石川半山・松村介石・根本正・和田垣謙三・酒井雄三郎・佐久間貞一・片山潜などが会員であった。顔ぶれでわかるように、思想的にはさまざまのものが混在しており、社会主義へのとくに強い関心は一部の人にかぎられるわけだが、時代としては進歩性をもつこういう集りが、社会主義意識の明確化、そのほかの社会主義的動向に幅ひろく関係してきている。

○七月、片山潜・高野房太郎らが、「労働組合期成会」を結成した。これには、もとより、日清戦後における産業の発展、生活費の騰貴、それによる賃銀増額要求のためのストライキの続出などという背景があったわけで、この組織の結成が、日本における近代的労働運動の発端といわれる。期成会は、「我国労働者の権利を伸張し、その美風を養成し、旧弊を除去し、同業者相互に親睦する組合の成立を期する」ことを目的とした。

○十二月、「労働組合期成会」の指導のもとに、近代的労働組合「鉄工組合」が結成され、同時に、片山潜を主筆としてその機関誌『労働世界』が創刊された。創刊号の「宣言」には、「労働世界の方針は社会改良にして革命にあらず、其資本家に対するや敢て分裂的争闘を事とせんとするにあらずして真正の調和を全うせんとするにあり」云々とあった(岸本英太郎『日本労働運動史』昭和二十五年 弘文堂)。さらに岸本氏によると、この期の労働組合運動の指導理論は、友愛組合的な労働組合主義、改良主義的労資協調論であり、片山理論では、社会政策的施設も市有都市公共事業も「社会主義の応用」で、「社会主義は資本主義とも矛盾するものではなかった」。が、その理論の本質や性格はとにかくとして、この労働運動の進展が、おのずから社会主義的なものを推し進める方向へつよく関係していることが、さしあたり注意されるのである。

○明治三十一年(一八九八)十月、筑水の「所謂社会小説」の発表より半年あまりおくれることになるが、ユニテリアン協会内に、「社会主義の原理と之を日本に應用するの可否を考究す」という「社会主義研究会」ができた。高木正義・河上清・豊

崎善之助・岸本能武太・片山潜・佐治実然・神田佐一郎・村井知至・幸徳秋水・安部磯雄・杉村縦横・楚人冠・平井金三などが会員だった(山口孤剣の『日本社会主義運動史』では、このほかに木下尚江・中村太八郎らを加えている)。旭山の『日本社会主義史』は、「その目的とする所『研究』」にあり、其の人物には片山の如き實際運動家あり、幸徳の如き物質論者あり、而して多くは基督教徒なり」と書き、「恰かも一八八三年に英国に創立せられしフアビアン・ソサイテの如き団体なりき」といっている。そして、たがいに「社会主義運動の半面をのみ有する不具者」であった「労働組合」と「研究会」が「遂に一団」となり、「社会主義的思想と運動と」が「渾然として一体」になって「社会民主党」がおこるにいたるのは周知のことだが、これはもう少しくだって明治三十四年(一九〇一)五月になるわけだ。

二

社会主義、そして社会主義文学への意識は、日清戦後やがてに、急速に成長してきたことは動かないところであるが、まえに引いた『日本人』の記述にあるように、「戦役以前、人心の倦怠に對する反動と、工業勃興して、職工の數大に増すとよりして、一代の論議は、社会主義に向て傾注せんとする勢」があつたことも事実だった。とともに、社会主義文学、さらにひろい意味にとっての社会主義的文学への関心もないわけではなかった。

社会主義についての素朴な知識や、ないしは一部におけるある程度をつよい関心は、すでに明治の黎明期からなくはなかった。それら、あるいはその後の展開の様相については、もっぱら専門家の日本社会主義史にまたなければならぬ。素人の管見はつつしまなければならないが、めくらの垣のぞきにも、少なからぬことが映ってくる。明六社から明治十年(一八七七)代にはいると、政治方面・宗教方面に、かなりきわだった関心がおこってくる。明治十二年(一八七九)の、自由民権運動側における、『朝野新聞』『東京曙新聞』間にたたかわされた社会党の利害についての

「關邪論」論争をはじめ、ロシア虚無党についての紹介や論議などが、目立ったものになってくるし、明治十五年（一八八二）六月から八月にかけて『朝野新聞』へ連載された城多虎雄の執筆にかかるといふ論説「論歐洲社会党」⁽³⁾になると、そうとうひろい視野から、ヨーロッパの「社会党」をながめようとしている。フリーエル（以下、人名表記もとのまま）、サン・シモン、ラーウエン、ブルードン、ラザール、マルクス、リーブクネヒトなどはもとより、バクニン、ドブロールボフ、チエルニーシエブスキーなどの、ほとんどの社会主義者の名まえば漏れなく出てくるし、もちろん「トルガニフ氏ノ著書ナル父子ト題セル小説」にも言及して、ヨーロッパの社会党および社会主義運動に、せいっぱいの理解を示しており、あの時期の達成としては、むしろ驚くに足るものがある。加藤弘之が、「真政大意」（明治三年）のなかで、「コムミュヌメヂヤノ。或ハソシアリスメヲ申ス。二派ノ経済学が起リテ」などといっていたころにくらべると、まことにめざましい成長である。それだけ日本の近代化への歩調には、複雑で急速なものがあったわけだ。

明治政府が成立して以来、明治二十三年（一八九〇）あたりへかけて、原始的資本の蓄積が強行されるにつれて、次に労働者がつくられ、同時に貧困者がふえてきた。明治十年代へ近づく、政治家のあいだにも、すでに貧富論や貧民救助法のことと考えられなければならなかった。これはまた当然、明治にはいつてあらためて興ってきたキリスト教（プロテスタント）のふくむヒューマニズムにもふれあつてくるはずである。が、なかには、明治十年代におけるプロテスタント教界のもっとも有力な宣伝誌だった『六合雜誌』第七号（明治十四年四月）にのった小崎弘道の例の「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」のように、かえって反対の地点から社会主義に関心を示すものもあった。つまり、「現在社会ノ組織ヲ変乱シ、君ヲ無ミシ父ヲ無ミスルノ野蛮世界に却步セシメントスル」いきおいにある欧米社会党の「惨毒ノ我国ニ波及セザル様」に、あらかじめこれを「防止」する方法として「人心ヲ満足セシムベキ真正ノ宗教ヲ皇張」すべきことを説き、おのずから支配者側へ吸収されながら、切実な課題として社会主義をとらえなければならなかった

のである。そして、かれ自身としては、そのことは、かれの宗教的ヒューマニズムと何らむじゅんするところではなかったものと思われる。

明治二十年（一八八七）代へはいると、それこそ、「一代の論議は、社会主義に向て傾注せんとする勢」に、しだいに近づいてゆくことになる。

「平民主義」なるものを標榜した民友社の『国民之友』は、明治二十年二月の創刊号からして池本吉治訳によるヘンリー・ジョージの「人ノ権理」をかけた、原著者紹介のなかに、「其平生平等ノ真理ヲ講シ社会ノ弊習ヲ論スル卓抜剴切大ニ世ノ耳目ヲ聳動ス今訳スル所ノ本篇ノ如キ其貧富ノ懸隔、人権ノ伸ヒサルヲ論スルヤ痛快切実誠ニ云フ可カラサルノ妙アリ」（傍点・筆者）などといっているが、以来、しばしば社会主義関係の諸文があらわれ、社会主義思想移植のもっとも有力な拠点の観があったことは、あまりにも有名である。旭山の「日本社会主義史」は、「盛んに『社会主義』てふ文字と其思想とを流布せしめたり」と言い、「或は露国虚無党を論ずるの寄書を連載し、或は欧洲社会党の五月一日運動の実況を報ずる長文を掲げ、或は社会党万国大会に関する通信を掲ぐるや、殆んど社会党の機関誌を見るの感ありき」（傍点・筆者）ともいつている。

この、いわば開化主義ともいふべき『国民之友』に雁行して、国粹の保存と顕彰とをうたいながらも近代的な科学主義を内在させていた政教社の『日本人』が明治二十一年（一八八八）四月に創刊されたが、この対照的な地点からも、日本近代化への明治政府のプログラムに対する批判の意をこめながら社会主義に注意をはらわなければならなかった。ややまとまったものとして無署名の「社会共産論」があらわれたのは、明治二十四年（一八九一）一月へくだることになるが、その前年（一八九〇）三月に創刊された植村正久（安政四年—大正二四年）主宰の『日本評論』が、民友社・政教社とはべつの、キリスト教的ヒューマニズムの立場から、すでにその第一号において、「何者か今日の文明を破壊すべきものなるや。（中略）嗚呼資本家と労働者の不調和こそ実に之が爆裂弾なれ」（無署名「利益分配法」といわなければならな

かった。そして、そのご、あるいは労働者の保護を論じ、あるいは現今社会党の勢力や近世社会主義の精神を紹介するなど、『国民之友』に必ずしも劣らないと思われるくらいに、「盛んに『社会主義』てふ文字とその思想を流布」している。「イライ氏の近世社会主義」(第二六号)の一節の「社会主義と基督教」には、「社会主義の運動は寔に基督教の如し、国民的にあらずして、宇宙的なり、其の向ふ所何ぞ国境人種の区別あらん、(中略)両者の目的は或る点までは同一にして共に人類全体の福運を進め、殊に貧弱なる階級者を扶け起すを以て旨趣とするなり。基督教は仁恵の感情を養ひ、一般の才智を發達し、普通教育を進歩せしめたり。而して社会主義は此等の条件を要求すること甚だ切なり。何となれば仁恵才智教育等不等なる時は、社会主義生存を全ふすること能はざればなり」などとみえている。

このようにして、日清戦争直前へかけて、いっそうの社会主義論議がおこなわれるのだけれども、「一代の論議は、社会主義に向て傾注せんとする勢」というなかに、いくらかの科学的なものから、宗教的・人道主義的なものまでがひろくふくまれるわけだ。だいたいにおいて、英米、とりわけアメリカにおける経験ないしはアメリカ側の知識を媒介とする場合が多かったとみられるが、この時期あたりまでの段階としては、日本資本主義がすでに孕んでいるむじゅんとか、現社会の制度や組織の不合理とかに対処するためのものとしての社会主義の必要、あるいは、社会主義のまぬがるべからざるものであること、および社会主義の一語をもって破壊を意味するように考え、平和に反対であるもののように考えることの妄想であることを認めようとする点で一致してきている⁽⁶⁾。けれども同時に、ロシア「虚無党」とドイツ「社会党」のもつ基本的思想——無政府主義と共產主義には不賛成で、とくに「虚無党」の「惨毒」を「防止」するための必要としてこそ社会主義を認めようとする、その点においてもまた一致しているとみている。また、おなじ点から、国家社会主義を要望しようとする一面も出てきている。こういう意味からすると、明治二十六年(一八九三)八月民友社刊の「現時之社会主義」(平民叢書第六卷、無署名——説に人見一太郎編著)と、おなじく明治二十六年、第二次『日本人』第一〇、一一、一二、一四号に連載された長沢別天の「社会主義一斑」は、それぞ

れ、社会主義の歴史や性質をひろい範圍にわたってよく整理してあるもので、前者は幸徳秋水や西川光二郎の社会主義への洗礼をほどこしたものだといえらるが、まえにいう一致点をめぐる円周からはみ出すものではない。「現時之社会主義」が、土地や重要産業の公有主義を排する他方において、「社会主義一斑」は国家社会主義への傾斜を示しているが、その基底に「過激」を否定することで共通のものがみられる。が、とにかく、このへんに、この時期における社会主義論議の帰着点があるように思われる。

素人のかけ足で、きわめて一面的に、かするようにつれてきたが、これらの波動は、つねに科学的な、純粹な社会主義論として展開してきたわけではなかった。柳田泉氏もいうように、「キリスト教の博愛思想、政治上の自由民権思想、哲学上の平等思想、人道主義、合理主義、学問の中でも哲学や政治学、経済学、さういふものにつつまれて入り、そこで生長してきたもの」であった。十年代の自由民権思想を最初の温床として、「宗教的な面、非宗教的な面、学問的な面、現実的な面と、いろいろ複雑なものをもつ」ところの二十年代の人道主義思想（ユーゴーの影響が多分にはいった）に、「主家をかりひさしをかりして生長して来た」わけである。

ところで、社会主義的文學意識というより文學的關心というものは、もちろん、ここにいうところの、社会主義思想を「つゝんでいるもの」に媒介されて動いてきたことはいうまでもない。さきにいった、金子筑水がとにもかくにもおのづからつかみえた社会主義文學意識にしてからが、こういう性質のものであった。社会主義論議が、どうにかこうにか社会主義論になり得ている程度の幾割にも及ばない程度においての文學意識でしかなかった。これは当然すぎるのである。しかし、ほのかな、遠いところからにせよ、社会主義の波動の高まりに關係しているのだし、というよりもむしろ反対に、むしろ現実に對する実感が、「つゝんでいるもの」に媒介されながら、社会主義ないしは社会主義論議の波動を高める方向へ關係していったことはたしかであろう。このことを、いくらか具体的にくりかえしていうことにしよう。

二葉亭四迷が明治二十二年（一八八九）四月の『国民之友』へ訳出した、ドブロリッポフの「文学の本色及平民と文学との関係」は、おそらくはかれ自身のそれをもふくめて、現代文学への警告の意味をこめたものだったが、日本語になった文学論として、まさしく時代を抜いた光芒を放つものだった。とともに、これこそもっとも高い社会主義文学論へつながってゆき得るものであった。けれども、二葉亭みずからも挫折し、この文学論も置きざりにされてしまった。『国民之友』をはじめ、社会主義論議の場をつくっていた、まえにふれてきた諸誌のほかに、『女学雑誌』その他のものを加えるとしても、多少とも文学論として成熟するほどの意識——したがって、そうした意識による文章は何らみられなかったし、また、あり得るべくもなかった。まえに、「社会主義的文学意識というより文学的関心」などという、はなはだあいまいな言廻しをしたわけなのだ。しかし、文字となつてあらわれると否にかかわらず、もとより、さまざまのかたちでの関心はあった。『日本評論』第二号（明治二十三年三月）は、巻頭に「社会に大勢力ありし三小説」（無署名・植村カ）をしかけて、スタウ夫人の「アングル、トムス、ケビン」、英国小説家ウオートル・ペサントの「人類の千状万態」「ギベオンの子」、ならびにエドワルド・ベラミイの「回顧談」を紹介している。オルツワ、ケント、カンヂヨンス、オラ、メン
ルツワグ、ベツケワルドヴェルニエ原作・川島忠之助訳の「虚無党退治奇談」などとならんで、トマス・モアの「ユートピア」が、自由民権運動による政治小説流行のなかから、井上勤によって「良政府談」として翻訳紹介されたのは、明治十五年（一八八二）だったが、「*Looking Backward 2000—1887*」が出たのは一八八八年だったから、政治小説流行の波頭でとらえられる機会はなかったが、原本の初版からわずか一年をなかに置いて、キリスト教徒の視野にはいったわけだ。これらの作品に接し、また紹介の筆をとったのは、もちろん、かれが最初でただひとりだったはずはないけれども、それに注意しているというそのことが注意される。黒人奴隷の問題、貧富の懸絶ならびにイギリス貧民の現状の問題、新社会の問題といった問題性・思想性が、「小説の世道に關すること大いなるものあるを示さんと欲す」というかたちで、文学の効用の点から問題とされていることはむしろ当然のことであるが、そういう効用の角度からするにしても、こ

これらの文学作品を、ことさらに巻頭においてとりあげていることは、並みならぬ関心といわなければなるまい。「回顧談」については、ベラミーの意見にけっして賛成するものではなく、この小説は、しばらくのあいだ空中に閃めく流星のごときのものであらうといっている。がまた、「社会変化の潮勢」を示す材料として注意すべきものだともしている。この一文にも、つまりは、「歐洲各国に社会党起り、或いは甚しきは虚無党を生じて、悲劇を社会に演出せんとする」ということの他山の石としての意がこめられていることはあきらかだ。文学の面においても、この筆者がキリスト教側であることは無関係に、まえにいった事情はかわらないのである。なお、このおなじ号に、ベラミー・クラブやベラミーの思想に半ば賛成し、半ば否定した他の論説がのっている。

社会主義文学(あるいは社会的文学)に対する、この程度の関心ならば、たんにキリスト教方面といわず、おそらくは多方面に、いろいろとみられたにちがいない。たとえば政教社方面においてもないはずはなかったし、げんにそれを考えさせるものもなくてはならない。右のベラミー紹介よりは一年半ぐらくだるけれども、明治二十四年(一八九一)の暮れにアメリカへ渡った長沢別天が、あくる二十五年の七月、サンフランシスコから『亜細亜』(第一次『日本人』後身)同人へ寄せた手紙の一節に「湖南兄(*内藤)には先達御仰により御送り申上候『カイザルスコラム』如何御味ひなされ候や書店をさがしみ候に社会小説いくつも有之」云々とみえている。政教社同人のあいだにも、社会主義小説——ここにいう「社会小説」にすくなくならぬ興味をもっていた様子がうかがわれるわけだ。ペーコン・シェークスピアで有名なイグナティウス・ドンネリーの“Caesar's Column”が出たのは一八九〇年だった。これが、「大破壊」と題して、三宅雪嶺のまえがきつきで、森本駿の手によって『亜細亜』第三八号(明治二十五年五月九日)から第六五号へかけて翻訳連載されたが、また、のち明治三十六年(一九〇三)六月、政教社同人の依緑軒磯野徳三郎(安政三年—明治三十七年)著「社会主義新小説 文明の大破壊」として単行本が出た。この翻訳についてはあとでふれるけれども、森本訳の原作者が、「エドムンド、ホイスギル、ベルト氏(米人)」となっているのは少し不審である。雪嶺の手にした原本は「余之を南土よ

り携へ来りて」とあるから、別天―湖南本とは別系統のものであるかもしれない。それはとにかくとして、このへん
のところに、政教社同人の社会主義文学に対する一面がのぞいているといっている。『シーザース・コラム』のほかに、
書店に「いくつも」みられた「社会小説」が、その後どんなふうになったか、つまり、政教社同人の目にふれたかど
うかは、つまびらかでない。ただ、ベラミーの「回顧談」が、読まれていたことだけはわかる。

それにしても、ここで一端をみたような社会主義文学への関心があつたとしても、それらが十分な文学意識として
は成熟してゆかず、また同時に、文学作品造型へむかつて、すぐには結びつかなかった。

実際の文学形象としては、もっと単純な、いわば日常的なところで、山田美妙斎の、よくいわれる「貧」(『以良都
女』明治二十三年九月)「夏の貧家」(『国民之友』同二十四年七月)などの詩や、きわめてほかに下層社会の人情にふれた
一、二の小説などにおけるような仕方では出てこなかった。広津柳浪のいわゆる悲惨小説にしても、貧そのものの、
あるいは貧富の懸絶を主題とするところまではいたっていなかった。あるいは、のちに社会主義に対してかなり同情
的だったといわれる宮崎湖処子の、すでに明治二十八年(一八九五)六月へくだったの「玉蜀黍」(『国民之友』第二七二号)
にしてさえも、貧富の対立に主題をとりながら、まだまだ意識の淡い、切実味も充実味もとばしいものであった。ま
ず、おだやかなキリスト教的人類愛にふれ合うところにいるものだった。

この時期で、社会的にもっとも切実味をもち、社会主義文学へ向つてもひとすじのつながりをもつ可能性をふくん
だものは、詩歌・小説のたぐいの審美的形態とはべつのところで書かれていた。ほかならぬ、下層階級の生活実態に
ついての調査報告あるいは記録的記述である。まえにちょっとふれたように、原始的資本の蓄積強行によって貧困者
が急激に増加するにつれて、もはやこれに目をつむることができなくなった。救貧問題が論ぜられる他方で、下層階
級の生活実態、労働条件の劣悪状況そのものが注視され、さまざまの報告・記述があらわれた。『朝野新聞』明治十九
年(一八八六)三月から四月へかけて「雑報」欄へかけられた無署名の「東京府下貧民の真況」⁽⁸⁾は、東京府下のひろ